

鳥取における「言語の壁」

【指導教員】 キップ・A・ケイツ アレクサンダー・ギンナン

【学 生】 石谷 堅 伊藤哲彦 植田拓朗 大倉沙希 門田侑那
川田莉愛 北山莉沙 木成郁子 下田雄大 ジンヒョンホ
田中玖実 西澤幸則 原 花鈴 樋引 元 平木里緒
廣田真菜 福田桃子 藤本みのり

はじめに

国際交流班は毎年、鳥取における国際的なテーマについて研究している地域調査グループである。今年、私たちは鳥取における「言語の壁」を取り上げることにして、アンケート調査、フィールドワークやゲストスピーカーのお話などを通して、観光と生活という2つの観点から言語の問題について検討した。

まずは、「言語の壁」の意味について説明する。私たちは、言語の壁を「異なる言語文化から生じるあらゆる困難」と定義づけた。例えば、買い物時に日本語が分からず欲しかったものとは違う商品を買ってしまった、市役所など公的機関で書類に書いてある日本語が分からず手続きが難しかったなどといったことは「言語の壁」による問題として挙げられる。外国人観光客と外国人住民が日本で増えている現在、このような問題はより深刻になっている。

1. 鳥取県国際交流財団への訪問

鳥取県国際交流財団によると、2017年12月末時点の県内外国人登録者数は4,329人である。鳥取県全体の人口に対して約130人に1人が外国人ということになる。国籍別の割合では、中国(1,021人)が最も多く、次いで韓国・朝鮮(1,014人)、ベトナム(818人)、フィリピン(559人)、インドネシア(137人)、アメリカ(105人)と続く。もちろん、この中に日本語が堪能な方も沢山いるが、そうでない方も少なくない。

私たちは、5月25日(金)に鳥取県国際交流財団を訪問した。鳥取県国際交流財団は、鳥取県における国際交流推進の基盤づくりと国際交流活動の支援を行っている組織である。この日に私たちは、財団の各事業と鳥取県に在住する外国人が抱えている問題について学んだ。

財団の事務局長は、鳥取県に在住する外国人が直面している問題を大きく三つに分類した「三つの壁」につい

て教えてくれた。一つ目は、言葉の壁である。日本で生活するためにはある程度の日本語を理解できる必要があり、日常会話はできてでも教育レベルの日本語は理解できないといった、生活言語と学習言語のギャップに戸惑う人も少なくない。二つ目は、制度の壁である。在留資格等により活動が制限されたり、外国籍児童は義務教育の対象外であったり、医療保険や介護保険に関する制限もある。三つ目は、心の壁である。生活習慣の違いから感じるストレスや言葉の不十分さから感じるストレスに悩まされている人もいる。さらに、親は自国の言語で話し、子どもは日本語を話すといった、親子間のコミュニケーション不足から生じるストレスで苦しんでいる人もいる。このような問題には、家族、先生、友達、行政など周囲のサポートが必要である。

2. 鳥取大学キャンパスでの調査

次に私たちは、鳥取大学のキャンパスで言語の壁について調査することにした。2018年4月の時点、鳥取大学には26の国から179人の留学生がいる。国別に見ると、中国(60人)、韓国(21人)、バングラデシュ(12人)、エチオピア(12人)からの学生が一番多い。鳥取大学の乾燥地研究の関係でアフリカの11か国から留学生が来ている。

2.1 鳥取大学の留学生

私たちは、鳥取大学の4人の留学生(中国・韓国・インド・マレーシアの出身)と鳥取大学で非常勤講師をされている川口斐斐さんをゲストスピーカーとして授業に招き、言語に関して困ったことについてお話をさせていただいた。

留学生たちは、生活面において「交通機関を使うのが難しい」、学習面においては「間違った教科書を買ってしまった」「教室で使う日本語と周りの生徒が使う日本



鳥取県国際交流財団



鳥取大学の留学生

語にギャップを感じた」と話された。一方、川口斐斐さんは、sun-in台湾人会の会長もつとめており、日本には長く住んでいる。川口さんは「言葉遣いが適切か心配する」「方言が難しい」「外国人という先入観をなくして付き合ってほしい」と話された。「外国人という先入観をなくして付き合ってほしい」ということに対して、私たち国際交流班のメンバーから「外国人と接するとき、どのようなことに気を付けたらいいのか」という質問があった。これに対して、川口さんは次のように答えた。

外国人と言っても、滞在期間等の個人差によって、日本語能力は様々である。しかし、一般的に第二言語として日本語を学んでいる人にとって方言や敬語などは難しい場合がある。そういう人に対して日本語を難しくする必要はない。一方、日本に長く住んでいて、日本語能力が十分ある人に、外国人という理由だけで、無理に易しい日本語を使う必要もない。自然に話してほしいという人もいる。そもそも出身国や見た目が違うと外国人として扱われがちだが、日本人と同じように扱ってほしいという人もいる。

このようなアドバイスを受けて、「外国人＝こうすればいい」というわけではなく、個人個人によって対応することが大切だと思うようになった。

2.2 大学キャンパスでの多言語対応

次に、私たちはグループに分かれて大学内の施設を訪れ、言語の問題に関する調査をおこなった。今回調査したのは、大学会館、共通教育棟、図書館、農学部棟、工学部棟、保健管理センターの6施設である。具体的な調査方法は、施設を訪れて多言語対応の状況を見て回り、資料を参照してどのような工夫がされているかを調べた。また、各施設の事務の方にインタビューを行い、留学生の対応などについて質問した。

保健管理センターは鳥取大学に所属する人向けに保険の加入と手続き、計測と診察を行っている。センター内には日本語を母語としない人向けに英語表記がされた問診票や、機器の使い方と計測結果の見方がそれぞれ英語で示されたものがあった。事務の方にインタビューしたところ、英語が話せるスタッフが常駐されているため、コミュニケーションをとるうえで言語の壁を感じることはあまりないとのことだった。また、専門用語などの難しい単語は言い換えることでコミュニケーションをとることにしているそうである。また、保健管理センターは留学生に学外の医療機関の情報や地図を提供している。なお、センター内のポスターやパンフレットは日本語表記のみのものだった。

3. 鳥取における国際観光の調査

鳥取県観光交流局観光戦略課が2017年に公表した「観光客入込動態調査結果」では2017年の宿泊施設全体の外国人宿泊者数が前年比40.1%増（実数では40,210人の増加）で計140,530人となり、2009年の宿泊者数14,020人から約10倍に増加している。従業員10人以上の宿泊施設では、総数125,180人中、国別に多い順から韓国49,580人（構成比39.6%）、香港27,530人（構成比22.0%）、台湾16,190人（構成比12.9%）、中国10,990人（構成比8.8%）などとなっている。前年との比較でも韓国が14,500人増、香港が12,030人増で突出して多く、米子ソウル便など独自の路線を活用して積極的な宣伝活動を展開している成果であるとみられる。

3.1 鳥取市国際観光客サポートセンターへの訪問

私たちは調査の一環で鳥取駅に隣接している鳥取市国際観光客サポートセンターを訪問した。このセンターは鳥取市が2010年に設立した外国人観光客向けの観光案内所であり、鳥取と周辺エリアの観光情報を提供するとともに外国人観光客への様々なサポートを行っている。センターには英語2人、中国語1人、韓国語2人、計5人の外国語に堪能なスタッフが配置されている。しかし、ほとんどの観光客は英語のみで対応しているようである。センター内では観光施設や宿泊施設を対象とした「外国人観光客おもてなし講座」が開講され、スタッフが外国人観光客の基本的な接遇マナーや簡単な英語を教えている。またボランティアで外国人向けに観光ガイドを行う「国際観光客民間サポーター」の支援により、外国人観光客のためにガイドや通訳のサービスも提供している。

さらに、鳥取市国際観光客サポートセンターは2011年に外国人観光客の周遊を促進するために「外国人観光客2,000円タクシー」というサービスを開始した。観光大学を卒業した観光マイスターが運転手を担当しているが、



鳥取市国際観光客サポートセンターでの調査

運転手は外国語に対応していないようだ。しかし2015年から多言語音声翻訳システムが2,000円タクシーに導入され、システムによる運転手と外国人観光客のコミュニケーションの円滑化の実証が開始された。この翻訳システムは英語、中国語、韓国語の3か国語に対応しており、音声翻訳だけでなく動画や画像の掲載も可能である。2017年からはタクシーだけではなく宿泊施設や観光施設への普及を図り、多言語翻訳システムの普及促進活動を行っている。

3.2 公共交通機関と多言語対応

次に、私たちは観光客が多く利用する公共交通機関の施設での言語の壁対策について知るために、鳥取駅と鳥取砂丘コナン空港で調査とインタビューを行った。

鳥取駅は県内外・国内外問わず、たくさんの人々に利用されている。今回は外国語表記の面から、外国人観光客への対応の現状を見ることができた。その一例が、観光地として有名な鳥取砂丘行きのバス乗り場の看板である。この看板は日本語に加えて、英語・中国語・韓国語になっていた。また、切符売り場の案内板には同様に四つの言語、構内案内図には日本語と英語が表記されていた。



4ヶ国語になっている看板

鳥取砂丘コナン空港では、券売機やバス乗り場、お手洗い、国内線出発・到着の看板などの目につく場所・物には、鳥取駅と同じく、日本語・英語・中国語・韓国語の表記があった。この理由として、アニメ「名探偵コナン」が人気であるアジア圏からの観光客が多いことがあげられる。今回インタビューを受けてくださった鳥取空港ビルのスタッフによると、外国人観光客とは主に英語でやりとりをしている。しかし、日本語・英語を話すことができない外国人とは意思疎通が難しいため、土日祝日には鳥取大学の留学生に通訳をしてもらったり、鳥取県国際交流財団に助けを求めたりすることもあるそうだ。現在は2020年開催の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、地方での言語の壁対策もますます迫られている状態である。

3.3 観光地での多言語対応

次に、鳥取の観光名所として人気の鳥取砂丘での多言語対応について調査した。最初に、お土産売り場「砂丘

フレンズ」を訪れた。この店では、英語の通訳ができるボランティアが1人、非常時のみいるとのことだった。少しだけ英語が話せるスタッフは2、3人いて、ジェスチャーで対応するときもあるとのことだ。従業員に外国人観光客の対応で困ったことについて伺ったところ、どうしても言葉が通じてない、対応に長時間かかってしまう、お客さん側がもういいやと折れてしまうなどがあると答えた。この店では中国語、韓国語、英語のパンフレットはあるものの、あまり持って帰る人はいないそうである。実際、パンフレットはお店の隅の方に置いてあり、見つけにくいという印象を受けた。



三者間通訳サービスの案内

次いで、砂丘会館というお土産店の食堂を訪ねた。従業員は、「外国語が話せるスタッフは、事務所にいるかもしれないが把握はできていない」と言っていた。外国人観光客の対応で困ったことについて尋ねたら、従業員は、「言葉が通じない、特に英語以外の言語だと困る」と回答し、言語の壁を感じていることが分かった。また、これらのお店には三者間通訳サービスや指差しコミュニケーションツールが置いてあった。指差しコミュニケーションツールには、来店時、注文時、会計時に店側と客側が利用する言葉やアレルギーについて英語、中国語、韓国語で表記してある。しかし、これらは大型連休のみに使用され、普段はあまり使っていないとのことだった。

最後に、砂丘のバス停とそこに設置してある時刻表も確認してみた。バス停は日本語のみならず、英語、中国語、韓国語の表記があり、時刻表は英語版も設けられていた。また砂丘には観光客にとってはありがたい、FREE WI-FIがあった。

3.4 街中の多言語対応

街中の多言語対応の状況を調べるために、鳥取駅前の若桜街道を歩き、道路標識や張り紙、看板などを確認した。最初に気づいた看板は、「自転車放置禁止」と表記したものであった。こちらの看板は英語、中国語、韓国語でも表記がされており、日本語と合わせて、4か国語になっている。全ての言語に対応した看板を作るのは無理であるが、話者数が多い英語や日本にはアジア圏からの観光客が多いため、韓国語や中国語に対応しているのが妥当と思った。

次に、道路の上の標識に気づいた。青い看板の地名などは全て日本語と英語で表記がされている。一方、白い方の看板も日本語と英語になっているが、「仁風閣」は単にローマ字で表記されているため、鳥取について知識のない方にとっては意味不明の可能性が高い。その上の「やまびこ館」「鳥取城跡」や下の「運転免許センター」の英語表記と同様に、もう少し説明的な英訳がある方が分かりやすいと思った。他の看板では、「仁風閣」はJinpukaku Mansionと英訳されている。これは、おそらく最近、外国人観光客に配慮して設置されたものである。



若桜街道の道路標識

4. タイムフェスティバル

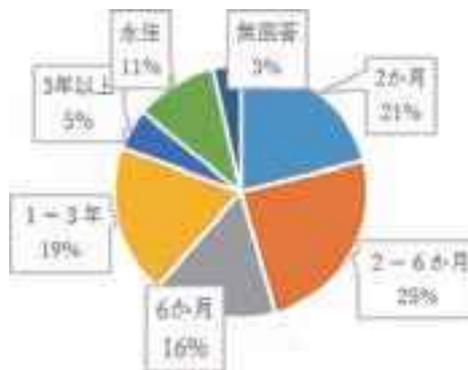
私たちは10月21日（日）にとりぎん文化会館で行われたタイムフェスティバルに参加した。タイムフェスティバルは、県内の国際交流団体や県内在住の外国出身者による国際交流イベントで、各団体の紹介ブースや各国の料理、伝統文化を体験できるコーナーが設けられており、私たちも国際交流班として紹介ブースを出展した。あわ

せて実際に鳥取での言語の壁についてどう感じているのか、現状を知るために、参加されている団体へのインタビューや来場された方へのアンケートを行った。



タイムフェスティバルでのインタビュー

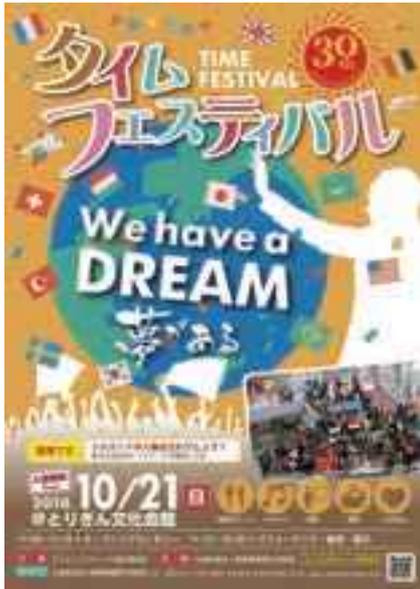
まず、外国出身者を対象にしたアンケートに回答していただいたのは57人で、そのうち鳥取に在住されているのは50人であった。また、日本滞在期間は以下のグラフが示すように、2-6か月が最も多いという結果になった。出身国は中国・韓国・フィリピンが8人ずつ、次いで台湾・マレーシア・メキシコが多かった。



アンケート回答者の日本滞在期間

言語能力についての設問では、話す・聞く・読む・書くの4技能について聞いた。日本語を話すことができるかどうかと聞き取ることができるかどうかという質問は、ほぼ同じような結果になった。全く話せない人は3%、全く聞き取れない人は5%と少ないが、完全に習得している人も1割程度と多くなかった。日本語を読むことができるかと書くことができるか、という質問に関しても似た結果になったが、全く理解できない人が前者よりも15%以上増え、少し理解できる人やだいたい理解できる人が多かった。

鳥取での言語の壁を感じているかという設問の結果は、次のとおりである。鳥取で言語の壁を感じていらしたことがあるかという設問では、あると回答したのは23



2018年タイムフェスティバル (チラシ)

人、いいえと回答したのは34人であった。場面ごとの同様の設問では、買い物では、困ったことがあると回答したのは12人、困ったことがないと回答したのは44人、無回答は3人。レストランでは、困ったことがあると回答したのは8人、困ったことがないと回答したのは44人、無回答は5人。交通機関では、困ったことがあると回答したのは11人、困ったことがないと回答したのは43人、無回答は3人。市役所では、困ったことがあると回答したのは16人、困ったことがないと回答したのは38人、無回答は3人。病院では、困ったことがあると回答したのは11人、困ったことがないと回答したのは38人、無回答は8人。また、どのような問題があるかについて詳しく記述してもらったところ、買い物やレストランでは原材料名やメニューが分からない、交通機関ではチケットの買い方とバス乗り場が分からない、市役所では敬語・専門用語が難しい、病院では漢字や医療用語等が難しい、症状を説明できないという意見があった。

鳥取での言語対応についての回答は、とても良い14人、良い27人、あまり良くない9人、悪い0人、無回答7人であった。鳥取の言語対応はあまり問題ないという回答が多かったものの、英語表記の看板の設置（買い物・その他）、方言が少し難しい、通訳を市役所や主な駅で利用できるようにしてほしいという意見もあった。

5. 日常生活における言語の壁

私たちは、生活面における多言語対応の状況を調べるために、ドラッグストアやスーパーマーケットでの調査を行った。ドラッグストアでは、海外商品の上には日本語表記が書いてあったが、日本語の分からない方が薬を買う際はどれを買えばいいのか、どこに何の薬が置いて

あるかなどを理解することは難しいのではないかと考えた。店員に確認したところ、外国語で対応する必要がある場合、携帯アプリによる翻訳を利用するそうだ。店内を見ていて唯一私たちが見つけた多言語対応は、「防犯カメラ録画中」や「立入禁止」といった注意書きの下に、中国語や英語が書いてあったことだ。つまり、唯一の外国語表記は、外国人による犯罪を防ぐための注意書きであった。



店内の多言語対応の例

また、スーパーマーケットで調査している時も気になる点を発見した。以下のアレルギー表示は、大豆の試食コーナーにあったものだが、日本語表示のみで、多言語対応はされていない。このようなアレルギーに関する情報は、人命に直接かかわってくるものであるため、優先的に多言語化するべきではないかと思った。



日本語のみの注意書き

2018年11月21日（金）、公的機関での多言語対応について調査するために、鳥取県運転免許センターに行った。普通免許などの試験は、警察庁によって作成され、2008

年から英語、2011年から中国語の試験問題が全国で使用されるようになった。しかし、鳥取県の東部、西部の免許センターでは、原付の試験のみを英語で対応している。普通免許の英語、中国語の試験は中部でのみでしか受けることができない。

病気に関する情報はとても重要なものになるため、どの県でも質問票は11か国語に翻訳されている。さらに、法令や運転に関する知識を聞く質問は、9か国語になっている。

免許センターでは、母国から日本の免許に切り替える手続きも行っている。鳥取県では年間約50人から70人が外国免許切り替えを行い、そのうち約10人程度が東部の免許センターで外国免許切り替えを行った。日本語があまり話せない人は通訳を連れてくるようにすすめられている。



鳥取県運転免許センター

次に、鳥取市の病院に日本語ができない患者が来た際に、どのような対応を行っているのかを調べることにした。調査するにあたり、いくつかの申請を行わなければならなかったが、時間の都合上できなかったため、直接病院で話を聞くことはできなかった。しかし、病院は電話で私たちの質問に答えてくれた。日本語のできない患者が来た際にどのように対応しているのかと尋ねたところ、英語で診療できる医師が対応している、とのことだった。また、鳥取県国際交流財団が医療通訳ボランティアを行っているという話もあった。

鳥取県国際交流財団は、月に一度、医療通訳ボランティアの講習会を行っており、国際交流班から6人がその様子を見学した。医療通訳ボランティアの派遣は2009年から始まった。対象言語は、英語・中国語・タガログ語の三か国語である。ボランティアを派遣する対象としているのは、県内に在住する外国出身者やその家族、県内の医療機関及び保健機関、その他財団が認める団体等

であり、依頼があった場合派遣する仕組みになっている。医療通訳ボランティアの活動範囲としては、一般的な診察、検査、薬の処方、母子健康、保健指導、診察手続き、入院手続き、会計等の各種手続きの通訳、入院中の患者と医療関係者との意思疎通を図るための通訳、医療制度や病院の設備の説明の通訳などを行う。しかし、依頼者の症状が重篤な場合や重要な告知、高度な専門知識が求められる通訳、治療費、入院費未払いの金銭交渉などのトラブルに関する通訳は活動の範囲外である。2017年度の医療通訳ボランティアの派遣数は、1年間に236件であり、英語での対応が多く、鳥取県東部に依頼が集中している。

	英語	中国語	タガログ語	その他	計
東部	124	40	0	3 韓国語1、 モンゴル語2	167
中部	26	34	2	1 韓国語	63
西部	4	2	0	0	6
計	154	76	2	4	236

2017年度の医療通訳ボランティアの派遣数

12月7日（金）、私たちは医療通訳ボランティアをしている方をゲストスピーカーとして授業に招き、様々なお話を伺った。来て頂いたのは、尾崎かおるさん、ケイツ佳寿子さん、柴田和さん、吉田淑子さんの4人である。まず、この4人に共通していることとして、もとより母語以外の言語に興味があり、海外での中・長期滞在経験や、外国語を扱う仕事に就いていたことが挙げられる。それらの経験の中で医療通訳の必要性を痛感し、更に外国語が出来る経験を生かして役に立ちたいという思いから、このボランティアに携わるようになったそうだ。実際にボランティアに参加する上では、ある程度の専門的知識を事前に勉強しておかなければならないこと、また、ほとんどの場合患者さんは一通りの治療を終えるまで同じボランティアの方に依頼をするため、その過程で受診する科の変更があった場合は新たにその分野についての勉強をし直す必要がある。担当する患者の中には、3か国の対象言語を母語としない方もいる。担当言語での通訳が通じず困ってしまうこともあるそうだ。ボランティアにとって重要なこととして事前勉強はもちろん、単なる通訳作業にとどまらず、医療現場ならではの不安に寄り添ってあげられるような精神面でのサポートも挙げられた。しかし、あくまでも医療通訳なので、責任を負い

きれない不必要な人的トラブル等を避けるためにも過剰なサポートまでは出来ないそうだ。このように、医療通訳ボランティアは、出来る範囲内で最善策を模索しながら活動している。また、皆さんが共通して言及していたのは、相互的異文化理解の重要性と、病院情報の多言語化の必要性である。

2018年は、日本各地で地震や豪雨などの異常気象による災害が相次ぎ、鳥取県もそのような緊急事態時の基本の対応は勿論、日本語を話せない外国人への迅速かつ正確な外国語での対応が求められている。そこで私たちは、外国人に対して、災害が起きた時どのような行動をとるべきかなどの事前知識、また災害が起きた後の事後支援がどのように提供されているのかについて調べることにした。

まず、2018年7月31日の『朝日新聞』に掲載されていた記事を下に、鳥取県観光戦略課内に新しく設立された外国人支援インフォメーションセンターについて電話取材した。外国人支援インフォメーションセンターは、2018年9月に起きた台風21号によって関西国際空港が閉鎖し、現地では言葉の壁から外国人に対して十分な支援が出来なかったことを受け、鳥取県は災害時に外国人に対応する機関を県庁内に設立された。英語・韓国語・中国語を話せるスタッフが各1名常に対応できるようになっており、災害時に避難の情報や交通機関の情報を取りまとめTwitterやFacebookなどのSNSで発信している。今後他の言語の需要が多いということであれば他の言語対応も取り入れるそうだ。

また、鳥取県国際交流財団が配布している防災ハンドブックもある。これは英語・中国語・タガログ語で刊行されており、地震が起きた時の知識や大雪の時の場合の対応について紹介している。鳥取県の特有の気候に対応しているという印象を持った。

このように鳥取県は災害時の多言語対応やパンフレットを通しての情報を提供している。しかし、パンフレットやサービスの知名度がまだ低いようなので、そこが課題だと考える。

まとめ

私たちは、鳥取における「言語の壁」の現状を知るために、鳥取大学のキャンパスでの調査から出発し、その後、観光施設や日常生活でのサービスの多言語対応について調べた。様々な多言語対策を調査する中で、ある問いを避けては通ることはできなかつた。それは、「何か国語に対応すれば十分か」という問いである。多言語対策にかかる予算的限界を考慮しつつ、多様な言語に対応することができるだろうか。その方法の一つとして、現



防災ハンドブック

在、翻訳機械の導入が広く行われている。

一例としてここでは翻訳機「POCKETALK」について検討したい。こちらは74の言語に対応しており、109の地域で使用することができる。実際に使用してみた感想としては、早く正確な翻訳が可能で、あたかも実際の通訳者を介しているようである。しかし、翻訳機で果たして「言語の壁」は完全に取り除けるのであろうか。実際はそのように単純ではないと考えられる。その理由としてまず誤訳の恐れが挙げられる。また、これに関連して前後の文脈や意味関係を無視した訳が行われる場合も多々ある。さらに、例えば日本語特有の概念である「わびさび」「木漏れ日」といった言葉を翻訳することは難しい。その他、文学的表現やジョークなどの文化的背景に依存した表現を翻訳することも苦手としている。したがって翻訳機によってあらゆる「言語の壁」を乗り越えられるわけではない。しかし、これらの翻訳技術が今後多くの場面で導入されるのは想像に難くない。昨年12月、外国人労働者の受け入れ拡大に向けた出入国管理法の改正案が参議院本会議で可決、成立した。この改正は今年度4月1日より施行されることになっている。さらに、2020年には東京オリンピック・パラリンピックを開催することになっており、より多くの外国人観光客の来訪が予想される。これらの外国人労働者や外国人観光客に対応するためには、これまで鳥取県内で活躍してきたボランティアの方々や翻訳技術の適切な配置が今後も求められるだろう。以上のように、今回の調査を経て現在の鳥取における言語に関わる問題を理解している。

ご協力いただいた皆さん

鳥取市国際観光客サポートセンター
鳥取県運転免許センター
鳥取県観光戦略課
鳥取県国際交流財団
鳥取砂丘コナン空港
鳥取大学の各施設
鳥取大学の留学生の皆さん
川口斐斐さん
医療通訳ボランティアの皆さん

参考文献

石井 敏、遠山 淳、松本 茂『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣、1997年
石井 敏、久米昭元、長谷川典子、桜木俊之、石黒武人『はじめて学ぶ 異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築に向けて』有斐閣、2013年
石井 敏、岡部朗一、久米昭元、平井一弘、古田 暁『異文化コミュニケーション キーワード』有斐閣、2001年
久米昭元、長谷川典子『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣、2007年
公益財団法人鳥取県国際交流財団『とっとり国際通信』第125号、2018年3月
茶井祐輝「外国人 避難に言葉の壁」『朝日新聞』2018年7月31日
鈴木 峻「鳥取や琴浦など避難指示」『朝日新聞』2018年7月31日
鈴木 峻「鳥取特化の翻訳アプリ」『朝日新聞』2019年1月31日
鳥取県観光交流局観光戦略課「平成29年度観光客入込動態調査結果」(2017)
鳥取大学入学センター『鳥取大学 大学案内 2019』
平山亜理「言葉の壁 学校手探り」『朝日新聞』2018年6月24日



鳥取大学の留学生の皆さん (2018年5月18日)



鳥取市国際観光客サポートセンター (2018年11月21日)



医療通訳ボランティアの皆さん (2018年12月7日)



国際交流班の学生と教員 (2019年1月26日)

Language Barriers in Tottori

Students: Minori Fujimoto, Momoko Fukuda, Karin Hara, Hajime Hibiki, Rio Hiragi, Mana Hirota, Ken Ishitani, Tetsuhiko Ito, Hyun-ho Jin, Yuna Kadota, Rie Kawada, Kaoruko Kinari, Risa Kitayama, Yukinori Nishizawa, Saki Okura, Yudai Shimoda, Kumi Tanaka, Takuro Ueda

Instructors: Kip Cates, Alexander Ginnan

Research on Regional Culture

Students at the Faculty of Regional Sciences conduct fieldwork and research in the local community as part of an intensive second-year course. Students are divided into several groups with each group pursuing a research theme of their choice. Every year there is a group of students that research an international theme in Tottori. Previous topics have included:

- 2005: *The status of foreign residents in Tottori*
- 2006: *International marriage in Tottori*
- 2007: *Education and international exchange*
- 2008: *Work and international exchange*
- 2009: *The 1927 Tottori-USA doll exchange*
- 2010: *Tottori, history and emigration to Brazil*
- 2011: *Sister city exchanges in Tottori*
- 2012: *Religion and international exchange*
- 2013: *Support for foreign residents in Tottori*
- 2014: *Food and international exchange*
- 2015: *Sports and international exchange*
- 2016: *Events and international exchange*
- 2017: *History of foreign residents in Tottori*

This year, students selected the theme:

- 2018: *Language Barriers in Tottori*

Language Barriers in Tottori

Our students began their research on this topic by considering a number of questions:

- What kind of language related problems do international students experience at Tottori University?
- What kind of language related problems do foreign tourists experience in Tottori?
- What kind of language related problems do foreign residents experience in Tottori?
- What kind of support is available to assist with these problems?

To find answers, students conducted interviews, listened to guest speakers, read books, researched websites, and surveyed various facilities.

Research and Fieldwork

Students carried out the following research:

Books, Data, Documents

- Data on foreign residents in Tottori
- Data on international tourism in Tottori
- Books on intercultural communication
- Newspaper and magazine articles on language related problems and initiatives

Talks by Guest Speakers

- International Students at Tottori University
- Fei Fei Kawaguchi (Tottori University Lecturer)
- Medical Interpretation Volunteers

Research Visits

- Tottori International Exchange Foundation
- Tottori City International Tourism Center
- Tottori Station, Tottori Airport
- Tottori Sand Dunes, and various stores
- Tottori Prefectural Divers License Center

Case Studies

Our class focused on the following case studies:

(1) Language Barriers at Tottori University

- Students surveyed the language situation at Tottori University by interviewing international students, examining the availability of foreign language information and language support.

(2) Language Barriers and Tourism in Tottori

- Students surveyed the language situation in regards to international tourism in Tottori by examining the status of multi-language signs, tourist information and services.

(3) Language Barriers and Daily Life

- Students surveyed the language situation in regards to daily life in Tottori by examining the status of multi-language information and services at hospitals, shops, public offices, etc. Students also examined new translation technologies as a possible solution.

Regional Contribution

For this year's social contribution, students:

- organized a display at the 2018 TIME Festival
- gave a presentation on their research at the Torigin Cultural Center on January 26, 2019

Acknowledgements

Our group would like to thank all the people who helped us over the year.